

あなたへ 真実からの伝言

―感動と生きる喜びを―

# 平和の礎

いしずえ

交野在住者戦争体験集

第六集



「平和の礎」第六集発刊にあたって・・・

この小冊子は、

公募に応じられた交野市在住の戦争体験者の寄稿と聞き取りを収録したものです。

前五集と共に、平和日本の礎となられた多くの御霊に捧げ、あなたを始め現在・未来を生きるかたがたにお伝えします。

交野市「平和と人権を守る都市宣言」を進める実行委員会

(会長 可児義明)

目次

発刊にあたって

▽寄稿・聞き取り (五十音順 敬称略)	
井村なつよ(私市)	みかん箱悲史「私と戦争・戦中・戦後の体験」…………… 3
金澤節子(妙見東)	「私の青春」は「戦争」 「戦争」それだけ…………… 7
小山繁(星田山手)	ボクラ少国民…………… 9
中世古力(星田西)	子ども戦争体験…………… 11
永田久子(倉治)	戦争と私…………… 15
若松富士男(藤が尾)	先輩の戦争体験談…………… 21
渡邊芳治(倉治)	義勇隊…………… 23
和田和彦(私市山手)	辛かった食糧難の日々…………… 25
和田光榮(私市山手)	戦後の食糧難を生きてきて…………… 27
▽「平和と人権を守る都市宣言」を進める実行委員会の活動報告	…………… 28
草薙正己(長尾)	妙見川原桜並木の戦禍…………… 29
住井麗子(妙見坂)	関西創価高校を訪ねて…………… 31
仲谷紀子(私市)	関西創価高校を訪ねて…………… 33
▽ラーニングクラスター2017年 ハイスクール平和提言	…………… 35
▽交野の平和記念モノメント(いきいきランド)	…………… 36
▽交野で発掘された出土品(飛行機の残骸)	…………… 37
▽交野市「平和と人権を守る都市宣言」	…………… 38
▽あとがき	…………… 50

## みかん箱悲史

### 「私と戦争・戦中・戦後の体験」

井村 なつよ(私市)

当時夫はハイラルより北二百キロ、ソ満国境に近い三河地方東額旗ナラムト旗公署に勤務しており、ソ連参戦一ヶ月前に満洲里とハイラルの中間地点にあるジャナイノール市(炭鉱の町)へ転勤になった。

私は幼い子三人も抱え、まだ官舎の中で地域の人たちにもなじまず、あのいまわしい国を挙げての悲劇の前夜、子供たちを寝かせていた。何時になく緊張した面持ちの夫から「近々ソ連軍が満州に侵攻してくるかもしれない。その時は、幼い児を抱え一時的にもせよ山中へ避難しなくてはならないことになるだろう。その時の準備や心構え等今から考えておくよう。」と聞かされた。突然のことにて胸をつかれる想いで聞き入った。

当然夫は家族とは行動を共にできないだろう。ああ、その時はこの可愛い子供たちをどの様に連れて逃げ延びることができよう。近々とはどのくらい余裕があるのだ

ろうか。床についたがなかなか眠れそうにない。そのうちうとうと何時間か眠ったのだろう。夏の北満の夜明けは早い。けたたましい電話のベルで夫は受話器を取るなり、とっさに「非常呼集だ、身支度を急げ。」の声と共に家を飛び出した。遠くドドーンという不気味な音が聞こえてきた。あっ、前夜の話が早や始まったのか。こんなせっぱつまった話が何でいまままで聞かされなかったのか。私は子供たちを地下室へ連れ込もうとして焦った。焦った四歳の長男は何が何だかわからないのに、おいたをしたとき「地下室へ入れますよ。」と脅かされたことを思っか、「いやだよ、いやだよ。ごめんさい。」と階段につかまって降りようとしな。夫は役所に行つて、また引き返してきた。ボーイが手伝つてくれて、とにかく女子供は駅にある石炭積み荷の貨車でハルピン方面へ南下することに決まった。準備を急げ。食料はあまり大きくないリュックに詰めた。塩、米、ミルク、おむつ、それ以上は入れない。私は、どこに行つても夜具代わりになる毛皮のシューバーを持ち、長男にも子供用のシューバーを持たせ、急ぎ用意をしたおにぎりを持ち、七ヶ月の三恵は胸にくくりつけ、三歳の長女は背負い、満人のボーイのおかげで駅の構内に着いた。転居して日が浅いので見知らぬ人ばかり。市内周辺の邦人の婦女子は全部結集させられた。早朝にかけつけた私どもは、次々に石炭を積み下ろした。ろくに掃除もしていない背丈より



深い貨車に入った。しかし、軍用毛布を敷いて足を延ばす余地もない。本当にすし詰めとはこのことでしょうか。やがてお昼過ぎにでもなっていたのでしょうか。長い時間かかって防衛のために残った男性、若い女性等に最後の別れをして出発した。後で聞くとところによると、男たちは防衛といつても警備隊を通じて行動をともしして市を後にし、最後にはハイラルの要塞入りをしたとのことでした。

夫は運よく生き残り、敗戦後はシベリア（クラスノヤルスク）送りとなる。これは後で聞いた話です。

私どもを乗せた避難列車は一駅毎に、奥地からぞくぞく乗り込んでくる邦人家族を乗せるため、驚くほど時間がかり、一日中動かない日もあったように思います。途中、避難列車はソ連機の低空機銃掃射に脅かされたり、飲み水がなかったり、赤ん坊のミルクを溶く水が無く、貨車に給水のため構内の高いところからちよろちよろ落ちてくる水で溶いて、肌で温めて飲ませたりしました。狭い貨車の中でひしめき合い衛生状態も最低で、子供たちも下痢を起し、その始末のため深い貨車の片隅から登り降りして外へ出るのも大変でした。



十五日、ようやくハルピン市に到着。喜んだのも束の間、人々がざわめきだし、新京方面へ南下できると思っていた希望も絶たれ、一応ハルピン市内に避難するよう伝達がありました。ハルピン市内は市街戦で混乱していました。どこどこが戦っているのかわからない。私たちはそんな中を誰彼の別なく大きな建物に分散させられました。私は高等裁判所の二階の一室に入り、足腰を伸ばし落ち着く暇もありませんでした。真夜中、ここも危ないということで、すぐ飛び出さねばならなくなり、唯一の寝具代わりにしていた大事なシューパーも持ち切れず捨て、長男の手を引き小さい子を前と後ろに背負い、人々の後について逃げ歩きました。

公園のようなところをさまよい歩きもしました。落ち着いたところがオリアント劇場（これも後で知ったことです）。

軍の毛布を敷いてろくに眠らず歩いたせい、子供たちも私も一応ホツといたしました。我に振り返りを見ると、新しい軍服を着た兵隊さん達が大勢座って、しかも「戦争が終わった」「故郷に帰れる」と喜びの乾杯を挙げている姿に驚きました。家族の写真を出して見入っている兵隊もいました。あの時の状況は今も忘れられない。ハイラルで戦った兵隊さん達と全く違う環境で、泥まみれでなかったのが何か異様に感じました。その後、いつの間にか兵隊さ

ん達はいなくなりましたが、後日武装解除とかいって皆さんの武器に続いて、首うなだれた兵隊さん達が隊列を作って通り過ぎて行くのを見送りました。

ジャライノールに残っていた夫達は無事であろうか、どこにどうしているのだろうか。オリアント劇場にも長く居られず次は学校らしき場所に移されました。そのころ私は何を食べていたか。悲しいかな記憶になく、ハルピンではどこからか炊き出しが出たようにも思えます。学校に移ってから日は日に日に難民の中から子どもや弱者が悲しい姿で運び出されて行くのを見ました。

このままでは私どもも生きて日本に帰れまいと思いました。私はふと結婚当時ハルピンについて日、最初に訪れた夫の親しい同郷の友人、吉田さん宅のことを思い出しました。馬邪講（マジヤコウ）の地名は忘れませんでした。収容所の仲間から離れ、想い出をたどりながら恐る恐る不気味な街中を探し歩きました。人通りの少ない所を歩いていたら満人が近づいてきて、長男に着せていた白い子羊の毛皮で作ったシューバーをはぎ取られてしまいました。一瞬のことでした。ついに吉田さん宅を見つけることができました。吉田さん宅は官舎ではなく、ロシア人が住んでいた家で、二階建ての隣にはロシア人が住んでおられ、こんな環境でも満人に襲われることもなく、警務庁勤務のご主人は早くから身を隠されて、奥さんとお子さんと二人で不安

な生活をしておられました。思いがけない私ども難民の受け入れをためらいもなく承知して下され、終生忘れられない御恩を感じております。こうして部屋らしいところに久しぶりに安心して寝かせていただいた夜半でした。赤ん坊の三恵が高熱を出しているのに気付いたけれど、看取る間もなく、医療もなく、翌朝あっけなく七ヶ月の短い命を終えました。涙さえ出なかったあの時、神様の親心を強く感じました。残された者への身代わりとしてお引き取りになったのだ。薄幸なあわれな三恵に心から手を合わせ、柔らかな綿のような前髪と可愛い爪を持ち帰ったことは言うまでもありません。

吉田さんの奥さんは、先に亡くなられたお嬢さんの着てられた花柄の着物を出し、三恵の冷たくなった体を覆ってくださいました。そして格好のみかん箱に入れ、ご近所の親しい方とで公園の人目を避けて埋めてくださいました。悲しいかな、この埋葬場所も私どもにはわからず、いまだに終生心残りです。その後も治安は収まらず、私のお世話になってる間に二度までも吉田さんは名指しでソ連軍から捜査されました。その時々、家に押し入り地下室に隠しておいた品々の中からめぼしいものをトランクに詰め替え、玄関に横付けしたトランクで運ぶ公然とした泥棒ぶりに悔しがったものです。

寒くなったころ、やがて日本人会も結成され、治安も一

応落ち着いた形を見せ始めますが、路上では公然と日本人宅からの盗品が満人の手によって並べられ、また軍からの物資でもあろうか、見たこともない白米や缶詰、カンパン、軍の毛布など、商魂たくましい満人で賑わっている路上の間々に、小さな手製の箱を首から吊るし、煙草を売っている日本人難民の姿が一層あわれさを誘いました。繁華街のところどころには、難民の婦女子が空き箱を利用した靴台で満人の大人（タイジン）が差し出す靴をせっせと磨いている姿もありました。帰国までの日々を真剣に生きている姿でした。

そのころ、満人が日本人の子供連れを見ると「売ってくれ、いくら出せばよいか」等といってくるのを恐れて、一層長男の手を握りしめ歩きました。それほど当時の彼らには日本人の価値が高かったのです。





## 「私の青春」は「戦争」 「戦争」それだけ

金澤 節子(妙見東)

昭和二十年八月十五日、日本が無条件降伏で終戦を迎えたあの日から、今年で七十四年になります。

今は、憲法九条に守られて平和に暮らせることを幸せに思います。けれども、私は終戦後よりも戦時中のことが忘れられません。

一九二五年十月十六日、大阪府中央区(当時の南区内堂町)で長女として生まれました。

今年で九十二歳になります。

母親が早く亡くなり、男手ひとつで育てられました。父親は、料理人で仕出し屋をしていました。

上甲子園で子ども時代を過ごしました。瓦木小学校を卒業し、高等女学校は大阪市内の堂島高等女学校へいきましました。

満州事変、盧溝橋事件に始まった支那事変、第二次世界大戦。終戦を迎えるまで、子ども時代と「私の青春」は戦争・戦争、それだけでした。

小学校から高等女学校の二年生まで、「あらゆる戦争は

勝っていて、負けるはずがない」と思っていましたし、学生時代、最初の二年間はごく普通にスポーツや勉強にと楽しい学生生活を送ることが出来ました。

そのうち、戦局が厳しくなつてからは、午前中は大阪市内の高等女学校で授業を受け、午後からは日本最大の枚方の大阪砲兵工廠で爆弾の弾磨きのような仕事を一生懸命にしていました。その時の学生たちの名前は、女子挺身隊でした。男性が戦地に赴き、労働力不足は深刻の一途をたどり、女性の勤労働員が強化されたためです。

学生生活を終えると、今度は大阪市内の延原製作所(当時としては大きな軍需工場、現在の延原倉庫)へ勤めることとなりました。このころから戦争が激しくなり、アメリカのB29爆撃機による無差別爆撃で油脂焼夷弾が雨嵐の如く投下され、私の周りで沢山の人々が犠牲になりました。

★恐ろしさは消えない、今でも夢に



操縦者の顔が見えるような低空飛行で、独特な唸るような爆撃音、本当に恐ろしく、逃げまどいました。十三大橋の下に逃げ切った時は、もう死ぬかと思いました。油脂焼

夷弾を身体に受けると衣服が燃えて焼死してしまうのです。まさに屍を乗り越えて逃げました。本当の地獄をみました。この恐ろしさは消えません。今でも夢をみます。

勤めていた軍需工場も敵機の標的となりましたが、この工場は奇跡的に戦火を免れました。いまでも延原倉庫としてあります。

東京・大阪の大空襲、広島・長崎の原爆など言葉にできない恐ろしい日々を経て、ようやく終戦を迎えました。

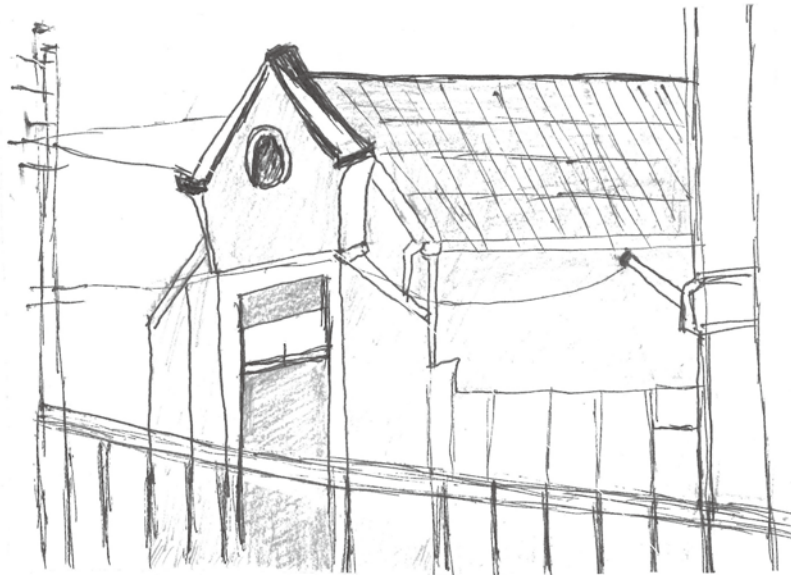
今日からは空襲もなく、夜も電気をあかあかと点けて（戦時中は真っ黒）好きな読書もできると、すごくうれしかったことを思い出します。

私は終戦後も残務整理ということで職場に残り、沢山の従業員の方々が戦地に赴き、無事戦地から引き揚げてこられた元従業員の人達の色々な手続きやお世話をさせていただきました。

そしてやつと昭和二十三年に勤めを終えました。それから、楽しい「本当の青春時代」を送ることができました。

現在は、皆さんのおかげで元気に楽しい日々を送ることができています。

戦争は世の中で何より恐ろしい。安倍さんが憲法を変えようとしています。皆さんとともに憲法九条を守り抜きましょう。



煉瓦つくりの延原製作所(現延原倉庫)  
環状線天満をすぎて見えます。



## ボクラ少国民

小山 繁(星田山手)

「万世一系神の国」「八紘一字」「大東亜共栄圏」「鬼畜米英」「撃ちてしままん」「ほしがりません、勝つまでは」六年生の夏まで、戦争に負けるまで、日本は必ず勝つ!?!と信じていた拙い少年の想い出です。

昭和十四年、学校に付属する幼稚園に入園。初めての遠足、八幡神社の境内に造られた「招魂社」まで歩いたのを覚えています。(今から思えばその年に「忠魂碑」が建てられたのだと思います。)

日中戦争は三年目に入っていたのです。とは言え教室には未だ「キンダーブック」という大判で美しい絵本の全集があり、これを見るのが楽しみでした。

翌年は尋常小学校一年生。この年は丁度「紀元二千六百年」。神武天皇が即位してから二千六百年ということ。「皇紀二千六百年」として国を挙げての大キャンペーンでした。金鷲輝く日本の、栄えある光身に受けていまこそ祝えこの朝(あした)、紀元は二千六百年。ああ一億の胸はなる。ラジオ・レコードは勿論、各学校でも教材として繰

り返し歌われました。

次の昭和十六年からは尋常小学校が国民学校に変わり、国民学校初等科二年となりました。二年生の冬休み、選ばれて書初め大会に出ました。初めて大きな紙に書いたのが「みいつ」の三文字でした。この「みいつ」の意味についてはつきり確認したのは成人してからでした。

この年陸軍大臣東条英機によって発表された「戦陣訓」に「戦っては必ず勝ち、あまねく皇道を宣布し、敵をして仰いで御稜威の尊厳を感銘せしむる処なり：云々」とあったのです。「みいつ『御稜威』」いつの尊敬語。天皇、神などの威光。強い御稜威(広辞苑)。

学校の校庭には薪を背負って本を読む二宮金次郎の銅像があり、校門脇の角地には二、三坪でしたが植木と石杭を鎖りで囲った立派な奉安殿(御真影、教育勅語が奉安されている)がありました。朝礼での国旗掲揚では高等科の生徒がラツパを吹いた。軍隊で使っていた進軍ラツパだった。赤い房を垂らし、子供なりに恰好よく憧れたものです。



十六年十二月八日には真珠湾攻撃で「大東亜戦争」が始まりました。その時に特殊潜航艇で玉砕した九人を「九軍神」として称えました。その一人が岡山県出身の片山兵曹

長でした。この片山兵曹長の写真と遺書が賞状風に印刷されて全生徒に配られ皆で暗誦しました。「ご両親様、二十五年のご慈愛を今思い浮かべつつペンをとりました。」という書き出しで結構長いものでした。

四年生での暗誦で最も重要なのは「朕おもうに我が高祖皇宗国を始じむること宏遠に」という「教育勅語」でした。これは長かったが全員覚ええました。当時は「紀元節」「天長節」「明治節」など学校での式典があり、その都度必ず御真影と教育勅語の朗読がある予行演習が行われました。

(今から思えばこれは校長始め先生方のためのものだったかもしれない。) また、飛行機の爆音を聴き分けるために音楽の時間に聴音(爆撃機か艦載機かなどを識別する)も始まりました。当時はドレミを日本名にしてハニホヘトイロハとしてCコードは「ハホト」Fコードは「ハヘイ」などと言いました。

六年生になりますと木製で銃の形をした木銃がついで「教練」が始まり「軍人勅諭の第一条」を暗誦させられました。これは長かったです。これはもう軍人のための勅諭ですから「一つ軍は忠節を重んじ、報国の心堅固ならざれば、如何程技芸に熟し學術に長ずるもなお偶人にひとしかるべし…」

敗戦後中学生だった先輩から天皇陛下も人間だと説得された時のショックが忘れられないです。



## 子どもも戦争体験

中世古 力(星田西)

### ★いとこの戦死

ガダルカナル争奪戦(昭和十七年～十八年)といわれる激しい戦いで私を可愛がってくれた、いとこ(三十歳)が妻と赤ちゃんを残して死んだ。私の伯母(いとこの母)はその数日後には髪の毛が真っ白くなって、おばあさんになった。悲しみて食べられず夜も眠れず一気に年を取ったからだ。遺骨は戦に行くときに遺しておく髪の毛と爪だった。私が一年生(国民学校)の時だった。

### ★爆弾が落ちた

確か二年生の時からアメリカのB29が飛んでくるようになった。ほとんど夜のことだった。夜、おしっこに起こされても目がさめないのにB29の「ゴォーン」という爆音ではすぐに目がさめた。何十機も次々に飛んでいったようだが、私には何百機も飛んでいるようすぎさった。

「おかちゃん、B29はどこへ行きよったんやろか」「きっと大阪を爆撃しに行ったんやろ」とささやいていた。しばらくすると爆音が再び聞こえ始める。おかちゃんは「帰って行きよんな」という。熊野から吉野を通過して大阪を爆撃してまた引き返していくのだった。私の家は大台ヶ原の南、熊野の北の山奥にある小さな村で険しい山の間をぬうように流れる北山川の川沿いにある。でもそこはB29の京阪神爆撃の通り道だった。それでもこんな山奥に爆弾を落とすはずがないと誰もが思っていた。ところが隣村の「イノタニ」という小さな村に爆弾が落ちた。後で分かったのだが、私の村には水力発電所(八〇〇〇kW/時)があつて大阪へ送電していた。その発電所をねらつて爆弾投下したらしい。この事件があつてから学校の朝礼で校長先生は「爆弾はメッタニ：はイノタニだ(爆弾はめつたに落ちないと思うな、イノ谷に落ちたのだから)」と言ひ、防空ずきんを使って爆風から身を守る練習をさせた。

### ★自給自足

一年生でも食べ物の「自給自足」という四字熟語を理解し、日常に使っていた。今、高学年に意味を聞いたとしたりどれくらい正解があるだろうか。小学校四年生に「戦争の反対語は何か」答えられない子どもが大変多いのだから



ら。動物性蛋白源は子どもたちが川から捕ってくる魚が主だった。砂糖を知らなかった。甘いものは芋飴、干し芋、吊るし柿、季節の果物の類でどの子も痩せていた。栄養失調と回虫で疎開してきた子が死んだ。

### ★校長先生の落書き

子どもは先生をはじめ大人には絶対服従だった。だから「優しい人」とはどんな人か知っていたように思う。厳しいけれど子どものことを考えてくれる人のことである。職員室へ入るとき「小二、中世古が植村先生のところへ来ました」と気を付けの姿勢でいなければならなかった。だから職員室に行くのがいやだった。その職員室に私たち地域の同級生の男子五名が呼び出されたことが二回ある。その一回目は北山川で「水泳許可」前に泳いだということまで叱られたこと。水泳といってもまだ泳げるわけではない。我々は魚とりの真似事をしていて、水泳の真似事になった。「魚とりならシャツやパンツを着ている。君たちはどんな格好をしていたのか」と聞かれ「はだか」と答えたら「その恰好になれ」と言われた。えらい校長先生の命令だからスッポンポンの裸になった。担任の若い女の先生が笑いをこらえていた。校長先生は「決まりを守らなかった罰を与える」と言って五人のチンコに毛筆の墨で×印を付けると

物入れの前に正座させた。裸でだ。

### ★イモじいさん

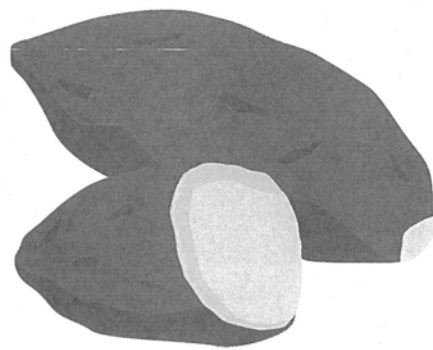
二回目は、八十歳を超えたおじいさんがいた。このおじいさんは「イノ吉」と言い昔はお金持ちで気位の高い人だった。今は一人暮らしで元氣だったが、腰が曲がり何時も杖をついていた。子供に声をかけるなどということもなかった。我々五人のやんちゃ坊主の仲間二人が、イノ吉じいさんがさつま芋畑にいるのを見てイノ吉の「イ」はイモの「イ」やから「イモじいさん」というあだ名を思いついて得意になった。それがいつの間にか仲間みんなの共通認識となった。陰で言っている間はまだよかったのだが、エスカレートして本人に対して「イノ吉じいさん、イモじいさん」と聞こえるように言うようになった。イノ吉じいさんは、年寄りで足が悪いから走れない。だから子どもを捕まえて叱ることはできなかった。気位が高い人だから悔しかったに違いない。イノ吉じいさんは逃げ足が速い子供に石を投げておどした。ところが反対に子どもから正確に石を投げられるはめになった。こんなことがあってイノ吉じいさんから校長先生に手紙が届けられたのだ。そして我々は校長室に呼び出された。

イノ吉じいさんの手紙はすごかった。巻紙に墨黒々と子

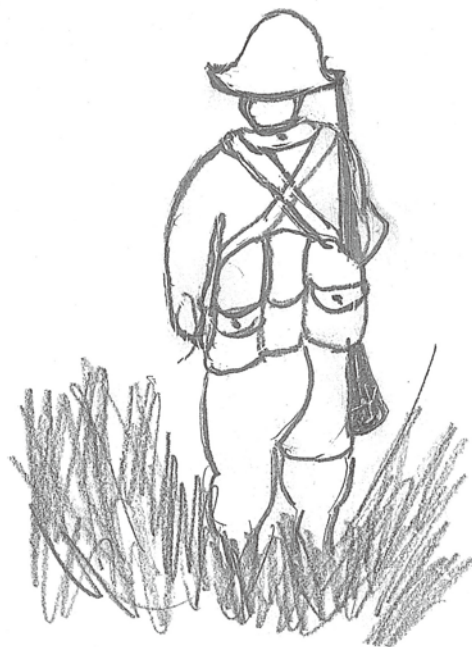
供には読めない字が書かれていた。「イノ吉じいさんは偉いんだ」と私は思った。校長先生は大変怒っているのが分かった。そして気を付けの姿勢で立っている我々の頭に校長先生の煙管（キセル）の雁首が飛んできた。瞬間は痛いというより「ズン」と重いものが当たった感じで今までに味わったことのない痛さだった。煙管の雁首は真鍮で作られているから額の上の所がミミズばれになった。親は何も言わなかった。知っていたのかどうかも分からない。これも子どもの戦争体験だと思っている。

私の兄が母親の反対を押し切り、勝手に印を押して少年航空隊の願書を先生に提出した事件やグラマンの三機編隊にゼロ戦一機がミニバイクのマフラーを外したような爆音で飛行雲を引きながら接近して行き、機関砲の音がして姿を消したり、グラマンが「七色の瀧」（地名）の下にある筏場を狙って機銃を撃ったりした。またアメリカの飛行機は燃料タンクの空を捨てていったが、それはアルミでもなく鉄でもない金属だと大人が話していたのを聞いて日本は負けるのではないかと子ども同士で話したりした。それは山へ落としていったガソリンタンクがジュラルミンというので作ってあるとか。それも捨てていくのはすごいとか。弾が当たってもアメリカの飛行機はなかなか落ちないとか。そんな国のアメリカに勝てる訳がない。でもそれは言っていない言葉なのだということも七歳から八歳の子

どもが知っていたのだった。また母親たちが校庭で竹やりを持って「ヤーツ」と突きの訓練をしているのを見て心配になったというこはいつぱいある。いま思えば子供も戦争をしていたのである。







## 戦争と私

永田 久子(倉治)

この作文は小学校六年生が広島へ修学旅行に行く前に読んであげました。

私は今八十三歳です。

遠い昔にあった戦争

だんだん意識も遠のいて、何か 夢の様な事やったんかしら

いやいやほんとの事

今の子ども達 話を聞いただけでは理解しにくいと思います。

今の世の中 平和ですものネ

(平成三十年記)



昭和十六年十二月八日大きな戦争がありました。それは第二次世界大戦と言い、日本の国とアメリカの国が戦争をしました。戦争と一口に言えば簡単ですが、つまり人間と人間の殺し合いです。神様から与えられた命、それは一つしかありません。その与えられた命を殺し合いで亡くすという事は、とっても無残なことです。戦争は戦に行く人、又残された家族の気持ちなどとても口では言い表せません。悲しい事です。日本のお国の命令で手紙が来ると戦いに行かねばなりません。その手紙は兵隊さんになって下さいという手紙です。それは赤い手紙です。むつかしい言葉で召集令状と言います。近所のおじさんや親類のおじさんも来たのでいつかは来るとお母さんが言っていました。それがほんとうになって私の家にも来たのです。ある日郵便配達の人が帽子をぬぎ敬礼をして、お母さんの手に手紙を渡し又敬礼をして自転車で行ってしまっただのを子供心にかすかに覚えています。手紙が来て兵隊さんになって行く日迄しばらく日々があつた様に思いますが、その間お父さんお母さんの二人の気持ちはとってもつらかったです。私は大人になってわかりました。兵隊さんになって行く日、近所の人達が一人一人日の丸の旗を持って、お父さんが先頭になって皆で氏神様へお参りに行きました。氏神様にお祈りした後皆で日の丸の旗を振り振り合唱しました。「勝ってくるぞと勇ましく、ちかかって国を出たからは、手がら

たてずにいらいりようか、進軍ラッパ聞きたびにかすかに浮かぶ旗の波」皆は「バンザイバンザイ」と旗を高く上げました。そしてはげまして下さいました。お父さんは「お国のために頑張ってください」とちかいの言葉を言っていました。氏神様から少し歩いて国鉄の甲子園口の駅迄来ました。お父さんは皆に握手をしていました。私と妹には「お母さんの言う事をよく聞いて体に気をつけなさいよ」とお父さんは言い残しました。その時私は小学校二年生でした。小さい心で思いました。もうこれでお父さんと最後になるかもわからないと一人で心の中で思いました。お父さんが行ってしまつてから毎日が淋しくとつても恐かったです。

戦争はますますはげしくなつて来るし、お母さんと私と妹三人です。一番下の妹はお父さんが行ってしまつてから生まれたのでまだ赤ちゃんでした。少したつてお父さんに会える日が来ました。面会というのです。お父さんはオハギが大好きで、お母さんはたくさん作つて妹達をつれて会いに行きました。そこは、大きな大きな校舎で広い広い運動場がありました。ベンチもたくさんあり、たくさんの人達が面会に来られていました。私達はお父さんを囲んで、しばらく振りに家族が一緒になりました。お父さんは、大好きなオハギを食べずに私や妹達に「食べなさい」と言うばかりで自分は一ケも食べなかつた様に思います。私や妹達は、小さかつたのでわけもわからずたくさん食べました。

今思うと父は、これが子供達との最後だと思ひ胸がつまり子供達の元気な姿を見とどけたかつたのでしよう。ほんとうにこれが生き別れの最後だったので。

お父さんはそれから二日後カラフトの千島列島に送られました。母は言っていました。「そこは寒い所で外に出ると耳がこごつてしまう所よ。寒い所に送られてかわいそうに」といつもお父さんの体のことを心配していました。便りは、私の方から出した手紙はついているのかどうかかわからずじまいでした。お父さんから来た手紙は三回でしたがお母さんの言う事をよく聞き体に気をつけなさいと書いてありました。戦争もだんだんはげしくなり学校に行つてもゆつくり勉強も出来ません。警戒警報と言つてサイレンがなります。「ウーウーウー」と三回続けて鳴ります。耳のつんざく様な大きな音です。B29の飛行機が日本の上空に入つて来たのです。勉強していても急いで校区毎に並びます。校区毎の場所はいつも決まっていました。早く集合して走つて帰ります。空襲警報は「ウー。」「ウー。」と一回ずつ鳴ります。これはもう、敵の飛行機B29が自分の上空に近づいているというサイレンです。サイレンがなるたびに胸がどきどきして、とつても恐かつたです。近所のおじさんや、おばさん達に手伝つてもらひ防空壕を掘りました。家の前が広い野原なので深い穴を掘り、その上に板をのせ、土をのせ、草など置いたりして、防空壕が空か



ら見ても見えにくく作りました。雨が降ったり又土の下から水がわいてくるので防空壕の中の水をバケツですくってほりました。敵が襲来した時には、いつでもすぐ入れるようにしとかなければなりません。又夜寝るときはお布団の横に防空ずきんと服をかならず置いて寝ます。防空ずきんというのは綿の入った布で作った帽子です。これは火の粉が頭にかかっても怪我しない様に作ります。電燈も黒い布をかぶして光が外から見えない様にしました。カメ用水の中には、いつも水をいっぱいはっていました。バケツや、なわであんだほうきなども横に置いていました。家に火がついた時にすぐ消す用意をしておきました。大きな袋には、塩、米、缶詰、などくさらない物を入れていました。飲み水はいつも入れ物にためていました。恐ろしい恐ろしい日がやって来ました。空襲警報です。夜中です。電気を消し、すぐ防空壕にとび込みました。もう敵の飛行機B29は近くの空を飛んできました。低空飛行です。それは一機とちがいます。何百と並んで飛んできます。音がだんだん大きくなってきました。近づいてきたのです。母と、私と、妹は、防空壕の中で抱き合ってもう体がぶるぶるふるえて泣いていました。でも大きな声を出したら敵に見つかると思い心臓が止まりそうでした。何百、何千機の飛行機の音で耳がつぶれる位それは、それは、大きな音でした。この上に爆弾落とされないかしら、気付かれたら、この防空壕空

から見つからないかしら、と思うと体がぶるぶるふるえ恐くて恐くてお母さんに抱きつき「こわいこわい」と泣きました。母も子供四人に抱かれ自分も恐かったです。爆弾を落としながらゴーゴーという大きな爆音をならしながら防空壕の上を飛んでいくB29、その心境は、口では言い表せません。生きた心地はしませんでした。その恐ろしさがしばらく続きました。長く感じた後、飛行機の音が小さくなったのです。私が防空壕から顔を出したとたん後から遅れた一機が私の頭の上を低空で飛びました。すぐ防空壕の中にとび込みました。その時機関銃や鉄砲で撃たれていたら私はもうこの世に生きていなかったでしょう。この時はほんとうに恐かったです。今思うと、敵が、子供なのでかわいそうと思ったのか、見つからなかったのか、それとも玉がなかったのか、いまだに私はあの時の事を思い出します。どうして撃たれなかったのかなーと。戦争はそんなやさしい物ではありません。人という人、赤ちゃんからお年寄り迄見つけられたら殺されてしまいます。もう飛行機も見えなくなったので防空壕の外に出ると目の自分の家が焼けかけています。隣りの大きな材木屋さんに爆弾が落ちたのです。私の家に燃えうつてきたのです。二階の屋根の方が燃えています。男手がないので消されません。妹達を防空壕に残して母と私と急いで家の中に入り二階から布団を下の庭にほりました。もう火がだいぶ燃えうつつ

てきたので木の廊下があつく、足の裏があつくなってきました。お母さんは、もっと布団をほりたかったのですが私が「あついあつい」と言ったので半分にして、前の大きな溝に布団を入れたら、又サイレンが鳴り急いで防空壕に入りました。又B29の飛行機がたくさん集団でやってきました。爆弾を畠に落とすのか、草があつちこつちで燃えていました。私の家もだんだん燃え広がりの大きなセメントの固まりで出来たベランダが「ドーン」と大きな音を立てて防空壕の目の前にくずれ落ちました。自分の家が目の前で焼けているのに、ただ見ているだけでした。外に出たらうち殺されてしまいます。あの音、くずれる瞬間私の頭から一生はなれる事は出来ません。とうとうみんな焼けてしまい家が灰になってしまいました。でも母と私と妹達も怪我なしで無事に防空壕から出ました。近所の人達は少しはなれた川に行き爆弾で死なれた人、怪我した人もおられました。戦争中は自分一人が身を守る事が精いっぱい、人の事はかばってなどおられません。母も一人で子供達を守ってくれました。焼けた家の柱から黒い煙があつちこつちで上り、タンスの中に入っていた私のきれいなお正月の着物のこげたのがたくさん出てきました。大阪の住吉のおじさんが西宮が焼けたとラジオを聞いて自転車でテールを運んで来てくれたのをおぼえています。焼けた布を母と集めました。どれもみなおぼえのある布で

す。胸がつまる思いをしました。母がこげた所を切り座布団を作りました。溝に入れた布団は、火の粉があたり二枚しか使われませんでした。住む所がなくなつたので、向かい側の家の二階を貸してもらいました。戦争も終わりやつと落ちついた頃手紙が来ました。それはそれは一生忘れる事の出きない悲しい白い手紙、死亡告知書でした。私が中学生の頃学校から帰って来たら母は泣いています。目をまっかにして：「久子お父さん死んだ」。弱々しい声で言いました。その声を聞いて体の血がすーっと引いていく様な気がしました。「お母ちゃん」と言って抱きつきました。その晩はもう悲しくて悲しくて朝の来たのもわからず親子五人ずーっと泣き通しました。私も妹も父が死んだので母も死ぬと思い「お母ちゃん死んだらあかん、死んだらあかん」と泣きじゃくって母にひつついていました。母も子供らを抱き寄せ「あんた達が大きくなる迄頑張るよ、死ねへんよ」と母も悲しさを抑えきれず親子で泣きあかしました。私の父は騎兵隊でした。馬に乗る兵隊さんの事で





す。次々と兵隊さんが伝染病にかかり、父もこの病気に  
かかったそうです。病院で亡くなったそうですが、食料や、  
薬もなく看護婦さんも少ないので死を待つしかなかったそ  
うです。死ぬ前に母や私や妹達に、どんなに会いたかった  
かと思うと父がかわいそうでかわいそうでなりません。戦  
争が終わって生き残った兵隊さんが帰国して来られます。  
どの兵隊さんも黒い顔をされ、帽子をかぶり、大きなリュ  
ックを背おって、足にゲートルを巻いて、重そうな靴をは  
いて、その姿を見て、父もこんな姿だったんだろうなと  
思いました。夜中でも兵隊さんの靴の足音はすぐわかりま  
す。音が近づくと「あっ！お父さんとちがうかしら」とい  
つも音を聞く度に胸がどきどきしていました。その事は私  
より母の方が倍以上、思っていたことでしょう。西宮市か  
ら合同慰霊祭があり、お骨をもらいました。今はお墓に眠  
っています。四十三歳でした。私の父は、お国のために戦  
ったのです。戦争後日本の国は食料がなく、大根の葉、芋  
の茎、豆かす、ダンゴ汁、薄い薄いおかゆ、せんべいだけ  
のときもありました。お腹がすいてたまりませんでした。  
畠もやり、野菜、芋、麦など作り、母の手伝いをしました。  
一生懸命しなければ食べる物がなかったのです。私は父が  
死んでから心の中では、いつもいつも「なぜ死んだの私た  
ちを残してお父さんお父さん」毎日ひとり言を言っては泣  
いていました。その心が通じたのか不思議な事が起こりま

した。それは、お百姓さんがジャガ芋を掘った後、近所の  
人達とその後を堀りに行きました。堀りながらも私は、父  
の事を悲しく思い出しながら掘っていると、くわに「カチ  
ン」と何か当たりました。それは石で出きた兵隊さんだっ  
たのです。私が夢に見た父の兵隊さんの姿そっくりです。  
私は一瞬びっくりしました。ジャガ芋をバケツにいっぱい  
入れてその上に石の兵隊さんをのせ持って帰ったら母が土  
をきれいに取ってくれて、父の仏壇に供えました。私はそ  
の晩思いました。お父さんに私の心が通じたのか、「この  
石の兵隊さんをお父さんやと思って持っていないさ」とき  
つと私に下さったのだと思いたい大事に大事に今も仏壇に供え  
てあります。

大人になった今でもお父さんの事はよく思い出します。  
私が小さい頃、お父さんはお酒を飲んで四つんばいになり  
背中私をのせます。私は「シー、シー」とお尻をたたく  
と、早く走り振り落とされた事や庭のイチジクを棒で落と  
してくれた事や、海へ行った事や戦争に行く前に庭にブラ  
ンコを作ってくれた事など思い出せば涙が出て来ます。仏  
壇の上には、父の写真があり私をいつも見つめてくれてい  
ます。恐かった戦争中、母と妹達と一緒だったので幸せで  
した。今、日本の国はとっても幸せです。この幸せがいつ  
迄も続く様にしたいものです。そしてたくさんの兵隊さん  
が亡くなられた事を忘れないで下さい。







## 先輩の戦争体験談

若松 富士男(藤が尾)

私はわけあって将来、工高の教師になるつもりで、工学部に入学しました。卒業の昭和三十六年には定員の関係で四月一日付の発令が得られなかったので、伊丹の中学校に勤めました。当時は敗戦により軍隊上がりの人が教職についておられる方がどこの学校にもおられました。私の赴任した学校にも年配の方で一名おられ、その方は私の学校の先輩で工専卒で、一学年の学年主任でした。

赴任早々一年の学級担任でしたし、めずらしく義務制の学校に先輩が来たという事で何かにつけて可愛がって頂きました。先輩は海軍の下士官(兵曹長)で輸送船に乗っていたが、マラリアで下船させられ九死に一生を得たが軍部は当時戦線の拡大を図るばかりで、兵器や弾薬、食糧、医薬品の補充を軽視していた。戦時下で輸送船の不足で、民間の船舶を徴用して物資の輸送を試みたが、ことごとく敵軍にみなやられ、戦場の一戦では兵器もこと欠き、喰うものもない。戦闘で亡くなるより病気や飢えで亡くなった。

歌の文句に堂々の輸送船とあるが、あれは肅肅夜海を過

る(わたる)沈没船だ。また、インパール作戦に従軍した兵士は、食うや食わずで皆死んだ。帰還した兵士は兵器を捨てても飯盒だけは捨てなかったと言っていたことを聞いたこともある。その言わんとしている事は想像するに値する。(私は人肉を喰うためだったのかと思った。)

学校行事の慰労会で酔い潰れながら喋ってくれたのは今でも鮮明に覚えている。

次は同じ伊丹の人でしたが、私の前任者で市内の四中学の合同教科会議のあと呑み屋に連れて行ってくれ、伊丹は昔から酒づくりで有名である。白雪・大手柄・老松の酒造がある。そこへ若松と言う後輩が来た。今日はゆっくり飲もうと言って、飲み酔うほどに、軍隊時代のことを話してくれました。

俺は陸軍の下士官(准尉)で戦地には行っていないが、上官より徹底的に洗脳教育を受けた。上官の命令は天皇陛下の命令であり絶対服従である。兵卒は国や天皇陛下の礎であり、それを体して掌に当たらなければいけない。(つまり兵卒は鉄砲の弾丸と思え)情は禁物である。上官はこうであるから、兵卒はたまったものではない。人間として扱ってもらえない。軍隊は上になるほど旨いものを喰っている。戦場の第一線で戦っている兵士は飲まず食わずであっても…と言うことを熱く話してくれました。

伊丹の中学から昭和三十九年に県尼崎工に転じましたが、

そこで沖縄が念願の施政権が日本に返還された日に、沖縄出身で、元陸軍の士官であったが敗戦で教師の道に入ったと言う老教師は返還を記念して、親しくしていた同僚十名ほどを前にして、戦時下の沖縄戦で戦鬪で疲れと飢えで意識朦朧となつて、死線をさまよっているとき、ふと出征の時、*「ああ、あの顔でこの声で、手柄頼むと妻や子が、ちぎれるほどに振った旗、遠い雲間にまた浮かぶ」*と言う歌で出征を祝ってくれた。それでふと我に返つた。ここで飢えと戦鬪で死んでたまるか、妻や子供や兄弟のために必ず生きて帰ると心に誓つた。これがなかつたら今の俺はなかつた…。

戦陣で散つた多くの人々は皆最後は天皇陛下バンザイでなく親・兄弟・妻や子供のことを思いながらだつたに違いない…。

戦争は人を変える。文化やその遺産も壊す。絶対に戦争はだめだと言つて泡盛を呑みほした。居並ぶ私たちもそれにつれて無言で前にある泡盛を呑みほしました。

ゲバ棒を振りまわしていた全共闘のメンバーが、東大の安田講堂の攻防戦のあと挫折したメンバーの一部が、母校の高校に帰つて一時高校もその関係で荒れた時期があつた。私たちの学校は同和問題で教育困難校になつていたさ中、校長として着任された氏が、シベリヤの抑留時代極寒の地で、黒パンの貧食で重労働に処せられているとき、玉ねぎ

の表皮を乾燥野菜だと言つて食べ、飢えをしのいだということも話してくれました。腹が減つては戦はできない。あの戦争は如何にして喰うかの戦いでもあつたと言つていた。そんなこともあつて私はこの飽食のご時世でも、食べ物に残さないように心掛けています。戦争は愚かな行為だと誰しもわかつていながら、どの国も軍隊を持ち、軍備に余念がない。

歴史は繰り返されると言われますが、今回の参院選もその方向に進んでいる。あの戦争の痛手を忘れたのか、戦争の知らない大人や若者は何を考えているのか。もう十年もすれば戦争の知らない世代ばかりになる。そうなつたら軍備のために国家予算がふくらみ徴兵制度が復活するだろう。今回の選挙結果は辛うじて改憲勢力が三分の二に届かなかつたのが救いであつた。

このような話をしてくれた諸先輩はもうこの世に居ません。私の心の財産を綴る機会を与えて頂いたことを感謝しています。



## 義勇隊

### 渡邊 芳治(倉治)

軍人でも軍属でもない少年が何故大陸で戦火に身をさらしたのか、私達は昭和十七年満蒙開拓青少年義勇軍として満州国（現在の中華人民共和国、東北部につくった日本の傀儡国家）にわたった。

政府は昭和十二年に、二十ヶ年で百万戸、五百万人の大陸移民計画を重要国策として決定した。それに合わせ中国への侵略化と植民地政策を進めた。日本の軍部は、ソ連との国境地帯に武装した開拓団と義勇軍を帯状に配置するところが戦略でもあった。満州建国の実現に資するという目的で第二次近衛内閣は四月の閣議で満州開拓の中核として義勇軍を創設し大量に送出することを決定し、市町村役場を通じて小学校長や教師への働きかけによって募集はすすめられた。

志願した少年は、担任教師すすめにより「義勇軍」という呼称に感動し、軍人にもおとらぬ祖国の守りと東洋永遠の平和を築く「銃と鋏とる戦士」に誇りを感じ応募への大きな決意につながった。また義勇軍として満州で三年間の

訓練が修了すれば開拓地に入植し十ヘクタールの地主が約束された。長い不況に喘いでいた農村の二、三男対策として親も耳を傾け、大陸での理想郷建設は大きな夢となった。義勇軍は昭和十三年の第一次募集から始まり、太平洋戦争が最悪の危機を迎えた昭和二十年も第八次義勇軍が募集され、内原訓練所に入所した。

昭和二十年、太平洋戦争は前年に引き続きアメリカ軍優勢で、爆撃機B 29は日本全土を襲い、三月十日には東京も空襲を受けた。

戦争に駆り出され若者のいなくなった市町村からは、さらに軍需工場や軍事施設へ女性も徴用され、学生、児童は農村の手伝いに動員される日が多くなった。こうした農村の労力不足のなかで、なお、義勇軍送出の手は弛められず従来どおり各国民学校(小学校)に所定の割り当て人数を要請した。私達は茨城県内原訓練所で三ヶ月の基本訓練を終え敦賀港から北朝鮮羅津に上陸、牡丹江、ハルピンを経て北安省鉄麗訓練所に入所した。

入所後は青少年義勇軍から青年義勇隊に名称も変更され軍人と区別された。訓練所の地区は匪賊(反満抗日救国隊、共産匪)の横行が激しく襲撃に備えての実弾射撃訓練も行われた。日課は農耕を主とし晴耕雨読、長い冬は学科と軍事訓練が本命だった。三年間の訓練も終え入植地も決まった矢先に軍からの強制的な要請があり軍役奉仕隊として隊



員の一部がかり出され第九八三二部隊に配属され、一ヶ月以上の特別軍事訓練を受け国境近くの野戦貨物廠に派遣された。任務は義勇隊訓練所で学んだ特技の活用と貨物の管理及び補給、現地労務者の監督のほずだった。が、現地(満州)での「根こそぎ動員」(軍隊経験の全く無い者を含む四十五歳までの全ての成年男子を召集)による訓練不足兵士の補佐で衛兵勤務、貨物廠警備にも就かされ兵隊と同等の責任を持たされた。

昭和二十年戦況悪化に伴いソ連国境も不穏となったが精銳は南方戦に転出し、老兵の多い貨物廠で若き義勇隊員の存在は大きかった。

八月九日ソ連軍侵入に伴い国境守備隊に編入され悲惨な戦いに巻きこまれた。(国境での戦いは第四集に)

※ 当時の感覚からすれば三十歳後半を過ぎれば老兵で

あり四十歳過ぎの兵隊は、私たちのお父さんと同年配だった

※ 参考資料「長野県満州開拓史」より



## 辛かった食糧難の日々

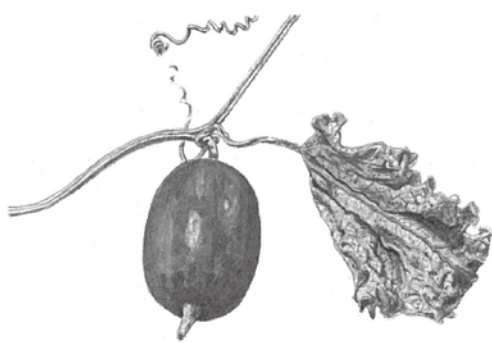
和田 和彦(私市山手)

私は一九三七年大阪府交野の星田村に生まれました。環境に恵まれたのどかな田園が広がったところに住んでいて、当時はほとんど車も通らないので道路が遊び場になっていました。

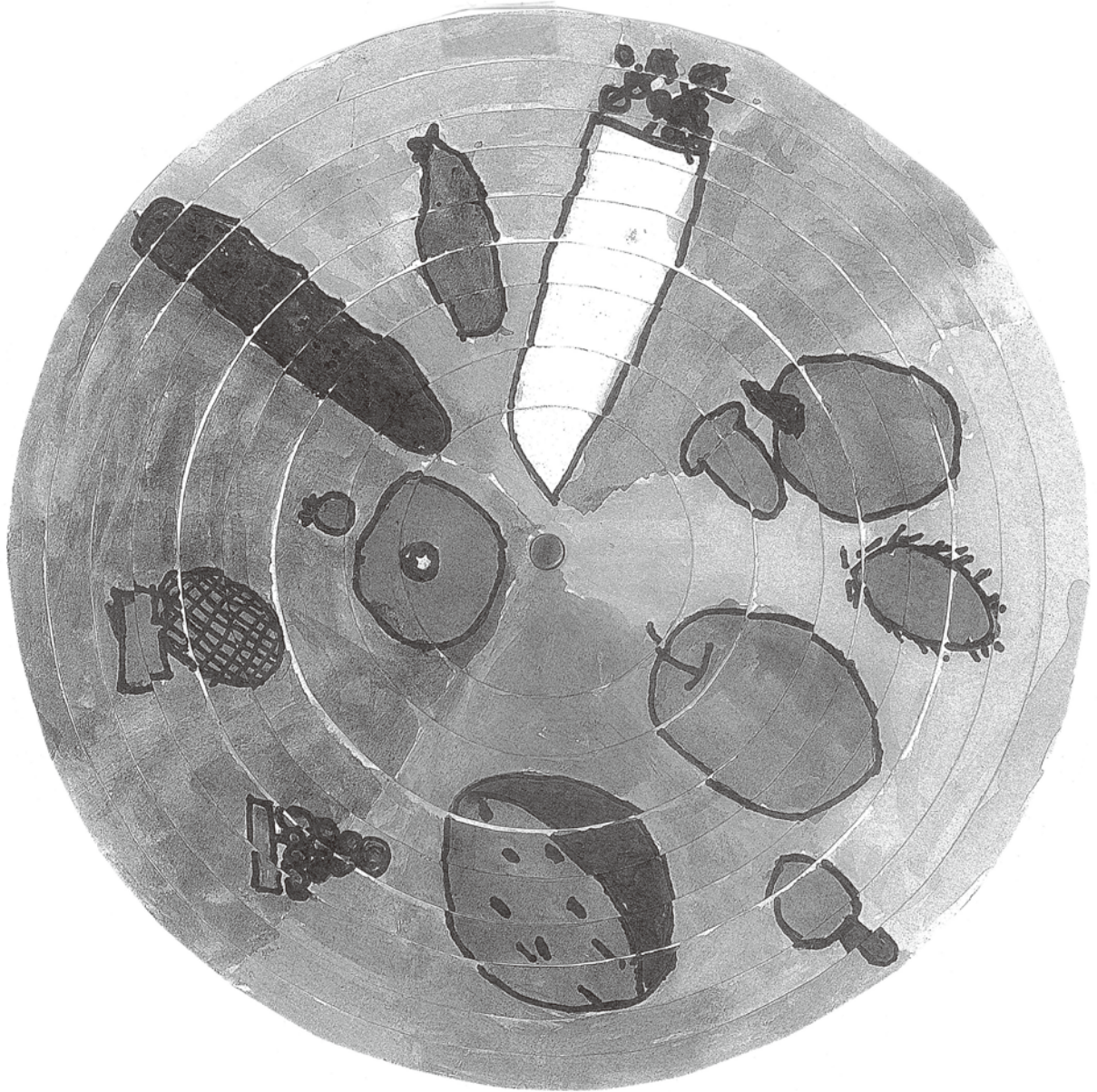
日本の国が戦争をしているのを知ったのは、四、五歳の頃、兄弟で遊びに使っていた三輪車が突然無くなり、母親に尋ねると、戦争に金属製品が多くなるので供出させられたと聞かされました。ある日父親に赤紙がきて、父の居ない母子五人の生活が始まりました。当時、母親は妊娠していて、数ヶ月後女の子が生まれました。収入が無いので、母は乳飲み子を背負い、朝早くから夕方まで働きに出かけ、兄弟が留守番をして風呂焚きや食事を作るのですが、薪で炊くので火加減が子供にとってむずかしく、苦労しました。戦争がエスカレートして、物不足で配給制度の主食の米さえ買いつらくて、代用食のイモ粉、トウモロコシ粉、じやがいも、さつまいも等も充分食べる事が出来ず、毎日空腹で我慢する日が続き、野山に行き食べられる物は何でも

採ってきて、アケビ、野いちご、スカンポ等で空腹を満たしました。戦争で怖い思いより、食べるものが無い辛さの方が記憶に残っていますが、ただ一度怖い思いをしたことがあります。それは友達と近くの傍示川に魚を取りに行き、その時、サイレンが鳴り突然戦闘機が低空で飛んできて機銃掃射にあいましたが、土手の陰に身を伏せてなんとか助かりました。戦争中、澄み切った青空を見上げるとB29の機影がゆうゆうと西の方向に向かって行くのを見ましたが、それが大阪の大空襲につながっていったのでしよう。

戦争は人と人の殺し合いで、何の利益もありません！こんな辛い悲しい思いは、子、孫には遭わせたくありません。これからも、ずうっとずうっと平和な暮らしが続くことを願っております。









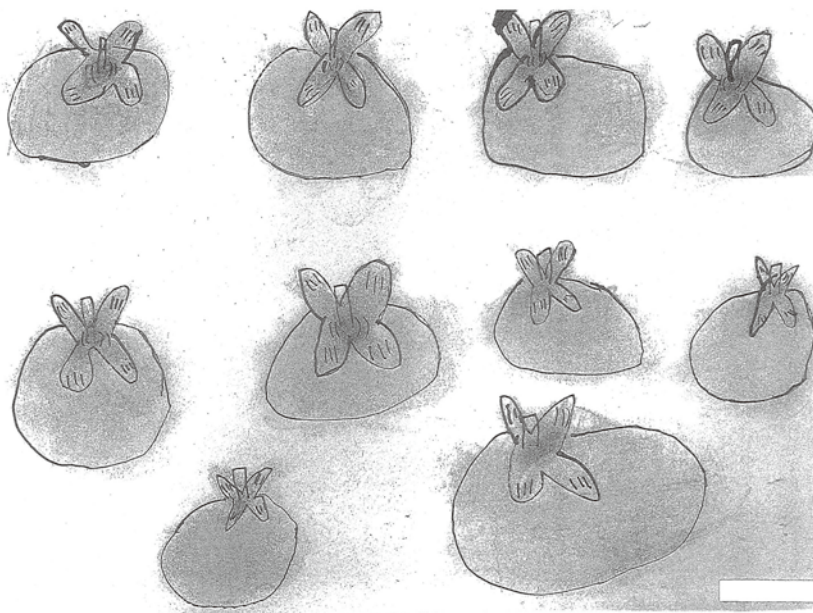
## 戦後の食糧難を生ききてきて

和田 光榮(私市山手)

「あゝ西の空が燃えている。」夜空に西の方角の空が、あかあかと、まるで夕日が燃えているような明るさだったので。後で思えば、一九四五年大阪大空襲の時で、その時に母が育ち、私が生まれた西区九条の家が焼けたのです。その前年、一九四四年秋に私たち家族は交野町大字私市に強制疎開させられたのです。当時私の家族は、祖母、大叔母、両親、兄妹八名、総勢十二名で、年寄や家族の多い家庭は強制疎開の対象になり、電気も無い、もちろん水道も無い所に、柿畑を借りて、大工の父が家を建てたのですが、蚊が多くて刺され、顔がお多福みたいにはれたのを憶えています。一九三九年生まれの私は、終戦の翌年に小学校に入りましたが、兄は五年生と二年生で、疎開者といじめられたそうです。

又、兄が「お母ちゃん、今日の弁当汁が出て困ったで」と言っただけで帰宅したのですが、それは朝炊いたお粥の実に多い所をアルミニウムの弁当箱に入れて持たせたからです。それ以外にも、母が姉の為にほそぼそと作って上げた着物が

がお米に化けて、その着物をその娘さんが着られているのを見て、辛かったとボヤいていたのを思い出します。私は戦時中の事は余り判りませんが、戦後の食糧難の辛さはよく判り、この先少々の食糧難がきても耐えられると、同世代の主人と笑って話しています。これからも、この平和がずうっと続きますよう、願うばかりです。



## 「平和と人権を守る都市宣言」を進める実行委員会の活動報告

### 一、紙芝居「被爆アオギリ」の出前講座

平成二十八年 十一月二十八日 関西創価高校  
令和元年 七月十七日 寝屋川市立明和小学校

七月二十九日 おおさかパルコープ

交野組合員集会所

十月二十三日 四條畷市立田原台小学校

平和教育の一環として、紙芝居の上演の依頼がありました。児童たちからは、広島へ修学旅行に行く前に、話を聞くことが出来て良かったと好評でした。

### 二、星田神社神主様からの聞き取り



## 妙見川原桜並木の戦禍

草薙 正己

香川県出身の私が最初に赴任したのが、星田小学校でした。春は桜シーズンと重なり、星田小学校のいくつかの学年が、地域学習や春の草花学習と兼ねて、桜満開の妙見川原まで出かけたものです。星田小学校で最初の担任が三年生だったのですが、三年生三学期になると社会科は「地域の移り変わりⅡ歴史」を学ぶ単元がありました。その年度の社会科校内研修終了後に星田生まれ星田育ちの教頭先生から「あの桜並木も終戦間近の時に、全部切られたのや」と教えていただきました。質問したがり屋の私は、「エーっ、燃料不足からですか？」と尋ねました。すると教頭先生から「いや違う。終戦が近い頃で、桜があると駐留軍が花見に来て、婦女子に被害が及ぶ恐れがあったからという話だったと思う」という答えが返ってきました。

私が交野市「平和と人権を守る都市宣言」を進める実行委員会の一員になり、「平和の礎」第五集の「交野と満蒙開拓団の縁」の寄稿に携わってから、一度妙見川原の桜並木の戦争被害に迫りたいと思うようになりました。

この度「聞き取りさせてください」と星田の知人のお父さんを訪ねましたが、「高齢の私よりも」と星田神社の神主様を紹介いただきました。

神主様も、

「聞いた話ですが」と前置きされて  
戦争前は妙見川原の桜はたいそう有名で、お花見シーズンには臨時列車が運行されていたこと。桜の種類は今のソメイヨシノではなくカタノザクラというヤマザクラに近い種類の花だったこと。桜の木の管理は、近隣の住民で担当区域を決めてお世話していたこと。日本の敗戦色が濃くなった頃、婦女子の安全への懸念から、桜の木を切るようになったこと。戦争が終わって、妙見川原の桜並木を再生しようと、実生でカタノザクラの復活を試みたが、うまく果たせなかったこと。そこで相談の末、ソメイヨシノで桜並木を再生することになったことを教えていただきました。

カタノザクラとはどんな桜だったのか？市の文化財担当者を探ねれば分かるかも、という助言もいただきましたので、青年の家を訪ねました。担当者から、「分かるかどうかわかりませんが、お時間をいただければ」と温かい対応を受けました。数日して、

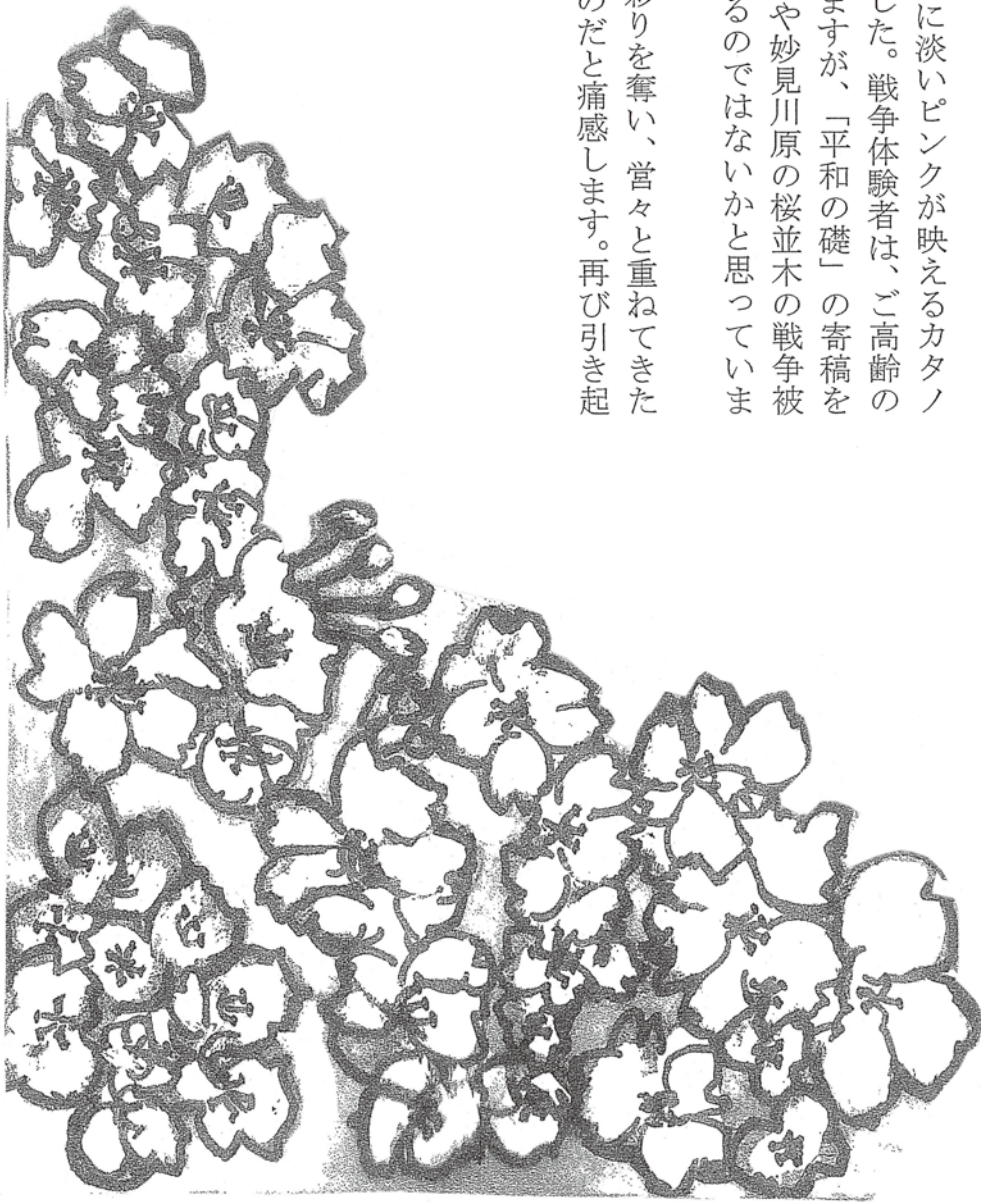
「カタノザクラは桜の固有種にはありません。ヤマザクラよ



りもカスミザクラに近く、ヤマザクラの葉は赤みを帯びていますが、それよりも緑がかつた葉をしていたということですから、という連絡を受けました。

私の目に、緑色の葉っぱの間に淡いピンクが映えるカタノザクラが勝手に浮かんできました。戦争体験者は、ご高齢のためだんだん少なくなっていますが、「平和の礎」の寄稿を機に、カタノザクラを知る方々や妙見川原の桜並木の戦争被害を伝聞する方々に遭遇できるのではないかと思っております。

戦争は、私たちの生活から彩りを奪い、営々と重ねてきた花や木々への慈しみも奪うものだと言感します。再び引き起こしてはなりません。



## —関西創価高校を訪ねて—

住井 麗子(妙見坂)

平成二十九年十一月、関西創価高校の利田先生より『平和の礎』を読んだ生徒たちにリサーチしてください」という依頼がありました。

スーパーグローバルハイスクール校の関西創価高校のラーニングクラスターという英語で地球的課題を探究するクラスよりの依頼で、研究課題は核廃絶に向けて人権分野からどのようなアプローチがあるかとのことでした。

私には難しい限りだが、なんと嬉しいこと。

これまで活動してきている「被爆アオギリ」の紙芝居上演と、被爆二世としての想いを語り、生徒さんたちの質問には答えられる範囲内ということ、快く引き受けました。

しかし、その反面、一人で抱え込むにはあまりにも大き過ぎる課題に、少したじろぎ、「平和と人権を守る都市宣言を進める実行委員会」の仲間の仲谷さんに、同行を依頼してみたいところ、快く引き受けてくださり、いざ二人ならと、意を決して、十一月二十八日訪問しました。

初めに、十五分の紙芝居上演(被爆一世の、現在九十歳になる私の母が、福山女子短大の方々と制作した「被爆アオギリ」の紙芝居)と、被爆二世として核廃絶の想いを語り、その後、生徒さんたちから質問を受けました。

生徒さんからは、

・戦時中、人権はどのように侵害されていたか？

・お母さんは敵国に対してどのような感情を持っていたか？

・どうして経験を書こうと思ったのか？

など、沢山の質問がありました。

一人一人の質問に、答えながら、語るには時間が足りないかと思いつつ

いつも母が語ることは

『人の命は、一人一人大切なものじゃ

原爆は一瞬にして多くの人の命を奪った

核兵器がこの世にある限り、平和とは言えない』

私はこの気持ちを受け止め、伝えて行きたく語っています。そして今日、この気持ちを受け継いでくださった皆さんは、もう、りっぱな未来の平和の伝承者です。」と語らせて頂きました。

仲谷さんも織田信長と猫の話でユーモラスに話してください、私も被爆二世としての思いを、かろうじて伝えることができたかと、感じつつ、終了しました。

後日、十人の生徒さんより嬉しいメッセージを頂きましたので、掲載させて頂きます。

・以前広島島の資料館に行きましたが、それでも今回初めて知ったことも沢山ありました。これからも核兵器の恐ろしさについて学び、二度と悲劇が繰り返されぬよう世界の人々に訴えていきたいです。

・核廃絶に向けもっともっとリサーチを深め自らが行動を起こして行けるようになろうと改めて決意することが出来ました。

・これからも地球の問題について私達こそが時代の指導者だと確信し、学び抜いて行きます。

・言葉では表せませんが何か心に響くものがありました。

・生命の尊厳を脅かす核兵器ではなく、人間の手で地球を守っていく必要があるということを改めて感じることができました。平和な世界を創る人材になります。

・これまで核兵器の本当の残酷さを心から実感したことはありませんでした。世界平和への決意を新たに勉学に励みます。

・まだまだ力はありませんがしっかりと勉強して必ず核廃絶に貢献できる人に成長します。

・一番印象に残ったことは私たちが未来の平和を担う指導者なんだっていうことです。だからこそ今出来ることは何事にも挑戦して少しでも学んで行くことだと思おうので全力で頑張って行きます。

・平和への一歩は一人一人の心の変化から始まると思います。核廃絶に向けて自分ができることに挑戦して行きます。  
・私の中で印象に残ったのは「戦争のないこの時代にどのような苦しみ伝えて行くのか」という言葉です。これは私たちの大きな大きなこれからのテーマだと思い、これからも学びを深めていきます。

平成三十年七月利田先生より、冊子「High School Peace Proposal」を頂きました。

現在、利田先生は退職なさっていますが、頂いた一冊の本から、高校生の方々の若く熱いエネルギーを沢山、頂いたと感じています。

お陰様で、改めてアオギリの紙芝居と広島市の被爆を語り伝えていく私の微々たる草の根活動に、少しの自信と活力を得ることが出来ました。本当に感謝しています。

この様な形で、高校生平和提言へのお手伝いが、微力ながらも出来たことを、嬉しく感じました。



## — 関西創価高校を訪ねて —

仲谷 紀子(私市)

二〇一七年十一月二十八日、関西創価高校の人権グループからお招きがあり、「平和」についてお話するという、大きな課題を背負って伺いました。

住井さんは「アオギリ」の紙芝居をされ、その後、被爆二世という立場でお話されました。

グループは、二年生・三年生の約三十名。私はその生徒たちの質問を受けました。

「核抑止力についてどう思われますか？」という難しい質問で『ええっ!!なんだこの質問は?なんて答えよう!!』

即座に出てきた言葉は、「みなさん、織田信長を知っていますよね。戦国時代に(ここで生徒たちは、このおぼちやん何を言い出すんや?という顔をしました)織田信長が新しい武器・鉄砲を使ったことで、戦国時代を統一するところまでいきましたよね!!その後も鉄砲はどんどん製造されるようになって、戦にはたくさん鉄砲をもっているものが有利になっていきましたよね。核も同じだと思いませんか。五か国(米・仏・英・露・中)が持っていて、均衡をた

もっている、抑止威力になっている、というのはあり得ない、より強く優位に立とう、世界を制覇したいと思えば、使いたくなるのが、人間じゃないですか。核保有は絶対に認めてはいけないと思います!」

そして、余談をもう一つ、

「おぼちゃん、野良猫の不妊手術活動をやっていきます。(ここでまた生徒たちは、ポカンと口を開けてびっくり顔)その活動費用に、廃品回収の収益金を充当しています。それでご近所の方々に協力をお願いしましたところ、ある方から、『紀子さん、猫より人間やろ!!』と言われました。

その言葉に私は傷つき、落ち込んでしまいました。夫は、『価値観違うんやから言っても仕方ないやん。』と言ってくれました。その言葉がストンと私の胸に落ちました。でも、そこで納得したのではないけませんよね!人それぞれ価値観が違って当たり前、その違いを話し合って理解し合う、それが平和的解決になるのではないのでしょうか?

あなた方は、語学も堪能の方ですので、海外の方たちとも交流されて、お互いが理解し、戦争をなくすように努力してくださいね。」と、猫活動を混ぜて、話をさせていただきました。私にも、平和とは?今何をすべきかと自分に問う良い機会をいただいたと、感謝しています。

以下関西創価高校から送られてきました人権グループの

『ラーニングクラスタ―2017年ハイスクール平和提言』を掲  
載させていただきました。次ページをごらんください。



ラーニングクラスター2017年  
ハイスクール平和提言

Protecting Human Rights from the Fear of Nuclear Weapons

核兵器の脅威から人権を守るために

人権グループ

43期44期生

1945年、広島と長崎に原爆が投下され、21万人もの人々が亡くなりました。原爆投下から72年経った今もなお、1万5000発以上の核弾頭が世界に存在しています。また、世界で核実験が繰り返され、人々の人権を脅かしています。

国際連合によると、「人権とは人間が生来持っている権利」です。人権と核の関係について、創価学会第2代会長戸田城聖は、「核あるいは原子爆弾の実験禁止運動が、今世界に起こっているが、私はその奥で隠されているところの爪をもぎ取りたいと思う。なぜかならば、われわれ世界の民衆は、生存の権利をもっております。」と述べています。戦時中に使用されたプロパガンダは、人々の敵国に対する憎悪や嫌悪を掻き立てるものでした。他国に対する憎悪や嫌悪が核兵器の使用という悲劇につながったのではないかと考えました。

これらの先行研究を踏まえて、今後核による悲劇を2度と繰り返さないために3つの研究課題を考えました

1. 戦時中、人々の人権が何故起こったのか
2. 現代社会では、どのような憎しみ、嫌悪の思想があり、人権ごどのような影響を及ぼしているのか
3. 人々の人権を守るため、どのように憎しみや嫌悪を転換することができるのか

これらの3つの設問を元に4つの機関でインタビューを行いました。インタビューを通じて、戦時中、人権という概念が人々の中に入り込んだことを知りました。また、多くの兵士敵を殺すことに心理的抵抗があったこと、しかし、軽蔑語の使用や身近の人の死が、殺人に対する心理的抵抗感を下げることを学びました。核兵器の使用を容認する考えの根本に人権に対する無知、また軽蔑語の使用があるのではないかと考え、現代社会で軽蔑語の使用を改めることが人権擁護、ひいては核廃絶へとつながるのではないかと考えました。また、被爆者の方の、身近な運動が社会的な運動になると青年への期待を受け、若い世代が核廃絶に取り組んでいくことの重要性を学びました。

インタビュー結果を基に、日本の中学・高校で「人権DAY」を設けることを提案します。この日には、保護者の方も学校に招待して、一人でも多くの人の核廃絶に対する意識の向上を目指します。人権DAYでは、人権と核兵器をテーマにしたスピーチコンテストと親子人権セミナーを行います。生徒はスピーチを作成するにあたり、核兵器について研究し、自分の意見をまとめます。発表を通して、友達や親にもメッセージを伝えていきますし、人前で発表することで、自信が付き、核廃絶により一層積極的に関わるきっかけになると考えます。親子人権セミナーでは、身近な軽蔑語や言葉の使い方について親子で話し合うセミナーの開催です。どんな表現が人権を脅かしているのか、どのように話せば相手への敬意を示して行けるのかを話し合います。このような身近な取り組みが、核廃絶につながるのではないかと考えます。この研究を通して、学生のうちから核廃絶に向けて興味や危機感を持つことが、後で地域や世界を変えていく大きな平和運動となりゆくことを学びました。本論文を通して、核廃絶に興味を持つ人が増え、身近なところから平和への行動を開始してゆく人が増えることを望みます。



# 交野の平和と戦争関連モニュメントから



平和の鐘 (いきいきランド前広場)



「平和と人権を守る都市宣言」碑 (いきいきランド前広場)



# 交野で発掘された出土品（飛行機の残骸）

2005(平成17)年3月16日に、交野市星田北8丁目の第二京阪道路建設現場で、飛行機の残骸が出土しました。交野市は、発見者の浪速国道事務所から出土品の引き渡しを受けました。

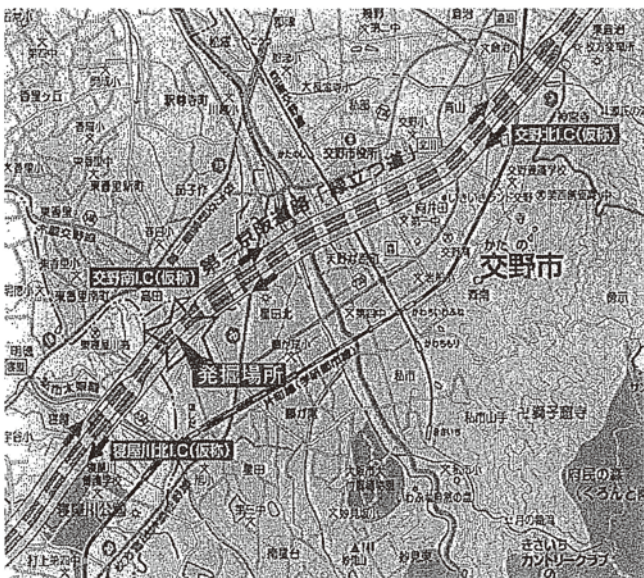
今後、出土品は、交野歴史文化や教育の一環に使っていきます。

## 概要

星田北地域の第二京阪道路建設工事現場で3月16日、橋梁基礎杭施行中に機関銃1丁と銃弾3発が発見されました。

その後、調査を進めるうちに3月23日には飛行機のエンジンとプロペラが見つかるなど、25日までに多数の各種部品が出土しました。

星田歴史風土記（平成7年、財団法人交野市文化財事業団発行）には、次のように史実が記載されています。



「60年前、第2次世界大戦の終戦前の7月9日、米軍機P51約50機が来襲、大阪上空で空中戦があり、鹿児島県出身の中村純一中尉が操縦する戦闘機・飛燕が撃墜され、星田に墜落しました。

中尉は、パラシュートで脱出しましたが、米軍機が翼でパラシュートのロープを切り、中尉は水田にしぶきを上げて墜死され、星田の村民が手厚く弔われた」と言われています。

今回見つかったこれらの部品は、エンジンのマークから飛燕のもので、中村純一中尉が操縦されていたものであることが確認されました。



## 平和と人権を守る都市宣言

あなたの強い願いがあるから  
きっと 核や戦争はなくせる

あなたの暖かい愛があるから  
きっと 差別や虐待はなくせる

交野のこころは「和」  
「平和と人権」はその命

かけがえのないものを  
あなたと共に守り抜きたい

そして さらにその輪が  
全地球に広がることを念じ  
『非核・共生・非暴力都市 かたの』  
をここに宣言します。

平成13年11月3日

交野市



## Dichiarazione della Città che osserva

### “la pace e i diritti dell’uomo”

Con il tuo desiderio forte, sicuramente  
possiamo far sparire le armi nucleari e le guerre.

Con il tuo amore sincero, sicuramente  
possiamo eliminare le discriminazioni e i maltrattamenti.

Il cuore di Katano è “Wa (l’armonia)”.  
“La pace e i diritti dell’uomo” sono i suoi elementi fondamentali.

Con te, vogliamo continuare a difendere le cose insostituibili.

Desiderando che i legami ispirati a questi principi  
si diffondano in tutto il mondo, dichiariamo  
“Katano, Città non nucleare, della convivenza pacifica e  
anti-violenza”.

3 novembre 2001  
Città di Katano

Traduzione: Centro multilingue FACIL  
(Organizzazione nonprofit)

## City Declaration on Observance of “Peace and Human Rights”

With our strong will, we can eliminate nuclear weapons and wars.

With our love, we can eliminate discrimination and abuse.

The spirit of Katano is “WA” or “Peace.”

The desire for peace and the respect for human rights are at  
the heart of Katano.

Together we stand and together we protect what is precious in life.

We wish that this circle of hope extends to and unites all people  
throughout the world.

Based on our commitment to these principles, we hereby  
declare Katano to be a  
“Non-nuclear, abuse-free city with compassion for all humanity.”

November 3<sup>rd</sup>, 2001

City of Katano

Translation: Multilingual Center, FACIL (NPO)

## Stadsverklaring voor het behoud van vrede en mensenrechten

Omdat jij er zo sterk naar verlangh,  
Kunnen wij atoomwapens en oorlog afschaffen.

Omdat jij zulke warme liefde voelt,  
Kunnen wij discriminatie en mishandeling afschaffen.

Het hart van Katano is “harmonie”,  
“Vrede en mensenrechten” zij haar ziel.

De dingen die onvervangbaar zijn  
Willen wij samen met jou beschermen.

Wij bidden dat de cirkel die wij samen vormen  
Zich uitspreidt over de hele aarde.

Hierbij verklaren wij Katano  
“Vrij van atoomwapens, vrij van geweld,  
een stad vol erbarmen voor anderen”.

3 november 2001  
Katano

Vertaling: Multilanguage Center FACIL (NPO)



## 「평화와 인권」을 지키는 도시 선언

당신의 간절한 바람이 있으므로  
반드시 핵과 전쟁은 없앨 수 있습니다.

당신의 따뜻한 사랑이 있으므로  
반드시 차별과 학대는 없앨 수 있습니다.

가타노의 마음은 「화합」  
「평화와 인권」은 그 생명

그 무엇과도 바꿀 수 없는 것을  
당신과 함께 지켜내고 싶습니다.

그리고 나아가 그 물결이  
전 지구에 퍼질 것을 염원하며  
『비핵·공생·비폭력도시 가타노』  
를 여기에 선언합니다.

2001년 11월 3일  
가타노시

번역 : 다언어센터 FACIL  
(NPO 비영리단체)

## MANIFIESTO DE LA CIUDAD PARA PROTEGER

### “LA PAZ Y LOS DERECHOS HUMANOS”

Sabemos que ustedes también pueden contribuir a erradicar del todo, “las armas nucleares” y “las guerras”, pues este es el deseo de todos.

Con su amor y bondad ayúdenos a erradicar la discriminación y los maltratos.

El corazón de la ciudad de Katano es unión. La paz y los derechos humanos son el fundamento de ella.

Queremos seguir protegiendo juntos la vida, esto que es algo irremplazable.

Además, queremos estrechar lazos afectivos y extender esta oración por todo el mundo.

Mediante este comunicado, La ciudad de Katano quiere principalmente decir:

“No a las armas nucleares”, “No al abuso”, y pedir a todos difundir el amor por la humanidad.

03 de Noviembre del 2001  
CIUDAD DE KATANO

Traducción: “Centro Multilingüe Fácil”  
(NPO/Organización establecida sin fines de lucro)

## DEKLARASYON NG LUNGSOD UKOL SA PAGTAGUYOD NG “KAPAYAPAAAN AT KARAPATAN NG TAO”

Dahil masigasig ang inyong paghahangad  
Mai-aalis ang mga sandatang nuklear at digmaan

Dahil sa inyong mapusok na pagmamahal  
Maiwawala ang diskriminasyon at abuso

Ang puso ng Katano ay “WA” o Kapayapaan  
Ang “Kapayapaan at Karapatan ng Tao” ay siya namang buhay

Magka-isa tayong pangalagaan  
Ang mga bagay na mahalaga sa buhay

At ipinapanalanging hanggang sa buong mundo  
Lumaganap ang pag-asang ito  
Idine-deklara dito ngayon ang Katano na isang  
“Lungsod na walang anumang nuklear, walang diskriminasyon at walang abuso”

Ika -3 ng Nobyembre 2001  
LUNGSOD NG KATANO

Tagapagsalin: Multilingguwal na Senter – FACIL  
(NPO Organisasyong di-pangtubo)



## 为护“和平与人权”的城市宣言

只要您有强烈的愿望，定能消除核武器和战争

只要您有温暖的爱，定能消除歧视和虐待

交野市的存在与心愿在于谋求“和睦”，“和平与人权”

希望和您共同努力，一起保护宝贵的生命

并且，期望您共同努力能扩展到全世界，

并在这里宣言：“交野市是‘不要核武器’，‘共同生存’，

‘没有暴力’的城市。”

2001年11月3日

交野市

翻译：多言语中心 FACIL

(NPO 非营利团体)

## Deklaration der Stadt Katano für Frieden und Menschenrechte

Kernwaffen und Kriege können durch starken Willen aus der Welt geschafft werden.

Liebe und Zuneigung können Diskriminierung und Misshandlungen aus der Welt schaffen.

Das höchste Bestreben der Stadt Katano ist Harmonie.  
Diese bekommt ihr Leben durch Frieden und Bewahren der Menschenrechte.

Es ist unser Anliegen, mit allen zusammen alles Unersetzbare zu bewahren.

In der Hoffnung, dass dieses Denken einmal die ganze Welt umschließen wird, erklärt die Stadt Katano hiermit die strikte Ablehnung von Kernwaffen und Gewalt und den Willen ein Ort harmonievollen Zusammenlebens zu sein.

Den 3. November 2001  
Die Stadt Katano

Übersetzt von Multilinguale Center FACIL(NPO)

## Déclaration de la ville pour observer

### “La paix et les droits de l’homme”

Ayant notre volonté de fer, nous pouvons éliminer l’arme nucléaire et la guerre.

Ayant notre amour de l’humanité, nous pouvons éliminer la discrimination et les sévices.

L’esprit de Katano est “WA” ou “La paix”.

Le désir de la paix et le respect des droits de l’homme sont les principes de Katano.

Nous sauvegardons ensemble ce qui est précieux dans la vie.

En priant la universalisation du cercle des principes,

Nous déclarons que Katano sera

“La ville de non violence, d’anti-nucléaire, et de coexistence pacifique”.

Le 3 novembre, 2001

Ville de Katano

Traduction : Le centre de multi-langue FACIL (NPO)



## Declaração da cidade sobre a proteção da Paz e Direitos Humanos

Porque você o pede com veemência  
Sem dúvida as guerras e armas nucleares desaparecerão

Porque você tem um carinho aconchegante  
As discriminações e maus-tratos desaparecerão

O coração de Katano é de harmonia  
Paz e Direitos Humanos são a sua vida

As coisas irrecuperáveis  
As protegemos com sua parceria

E depois que esse círculo global  
Alcance a todas as nações  
E a cidade de Katano, repudiando as armas nucleares, pacífica,  
coexistente  
Realiza aqui a sua declaração.

3 de novembro de 2001  
Cidade de Katano

Tradução: Centro Multilíngue Facil  
(NPO/ Organização sem fins lucrativos)

## Декларация в защиту мира и прав человека

Силой нашей воли мы можем уничтожить ядерное оружие и угрозу войны.

Глубиной нашей любви мы можем уничтожить дискриминацию и насилие.

Мир и согласие - атмосфера Катано.  
В сердце Катано - стремление к миру и уважение прав человека.

Все мы стойко и единодушно защищаем то, что незаменимо в жизни.

Мы хотим, чтобы эти наши желания, как круги по воде, распространились и объединили всех людей мира.

Настоящей декларацией заявляем, что Катано является городом неядерным и ненасильственным, городом мирного сосуществования.

3 ноября 2001 г.  
Город Катано

Перевод: многоязычный центр «Фасил» (НКО)

## あとがき

「平和の礎」第六集を発刊することができました。戦中、戦後の体験を語ってくださる方が少なくなり、原稿を頂くことも困難になってきています。決して忘れてはならないこの体験記をいかに伝承していくかが、私達の今後の課題です。ご協力いただきました皆様ありがとうございます。

編集者 平和継承事業部会

編集委員 可児義明

草薙正己

清水秀子

住井麗子

千本忠一

玉井八恵子

仲谷紀子

吉川佐喜子

題字 渋谷 正 挿絵 梶本博子 清水僚太 牧田実優

表紙「コスモス」は、秩序と調和ある宇宙を意味することは、花のコスモスは秋の桜とも呼ばれます。

## 「平和の礎」いしずえ

—交野在住者の戦争体験集第六集—

令和二年二月発行

発行者

交野市「平和と人権を守る都市宣言」を進める実行委員会

(市) 人権と暮らしの相談課

交野市天野が原町五丁目五番一号  
電話〇七二―八一七―〇九九七